

濟州島の考古学研究

後藤 雅彦

本報告では、各年度の調査内容を整理し、その成果を踏まえながら、濟州島という島嶼域における考古学研究の課題について、他の島嶼域との比較を合わせて整理してみたい。

1. 調査の内容

ここでは、各年度の調査内容を整理したい（第1図）。

(1) 1998年度

本年度の調査は、徳修里における考古学調査を目的に実施したが、調査初年度と言うこともあり、まず濟州島における考古学研究の状況把握を行ない、さらに徳修里が含まれる濟州島南部（安徳、大静）の考古資料の確認にあたった。

調査内容としては、濟州島南部を中心に濟州島の各時代に亘る代表的な遺跡の踏査と濟州大学校における資料実見及び文献の確認を行なった。

(主な調査内容)

- ①濟州大学校博物館、濟州道民俗自然史博物館の見学
- ②徳修里
- ③水精寺、抗蒙遺跡、北濟州群涯月邑古城里（土城壁・窯址）
濟州牧官衙址、大静城址
- ④上臺里遺跡（第1図遺跡番号4）、三陽洞遺跡（番号5）、高内里遺跡（番号8）、
郭支貝塚（番号7）、高山里遺跡（番号1）、龍潭洞支石墓（番号6）

(2) 1999年度

今本年度の調査は、まず、牛島に行くと途中、城山の畑地において、瓦、新羅陶器、

高麗青磁片などを確認し、また、道路傍の断崖において貝層が露出している状況がみられた。

牛島では、すでに確認されている支石墓を実見し、済州大学校博物館の調査チームが実施していた分布調査にも同行し、牛島における考古学資料について確認することができた（註1）。その後、牛島の支石墓と比較検討するために、済州市に戻り、支石墓を中心に踏査を行った。

（主な調査内容）

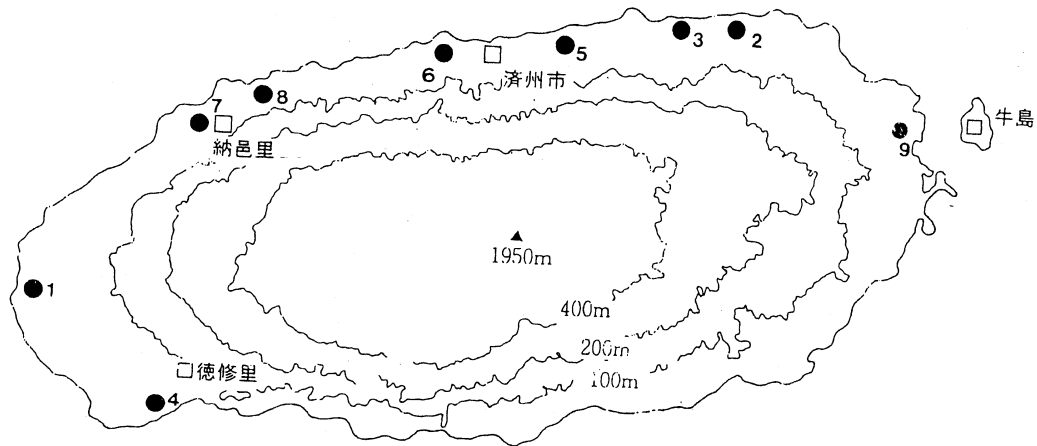
- ①牛島の調査
- ②支石墓の調査
- ③済州民俗自然史博物館において、開催されていた『済州発掘遺物特別展』の見学。済州島における考古学調査の進展を確認。

（3）2000年度

本年度は、郭支貝塚の踏査を中心に下記の調査を実施した。なお、各遺跡の報告書などの文献について、可能な限り確認を行った。

（主な調査内容）

- ①郭支貝塚の踏査（北済州郡・済州大学校博物館 1997 a）
- ②烽火台遺跡の実見
関野雄（1938）
「済州島には烽燧台址が多く、（略）これ等は平地にあるものと山頂にあるものとで構造を異にし、（略）両者とも海岸に近い眺望の開けた所に設けられている」
済州道（1996）
烽燧 25ヶ所 煙台 38ヶ所
- ③終達里遺跡の再確認（北済州郡・済州大学校博物館 1997 b）（番号 5）
昨年度、牛島の対岸地である終達里遺跡を踏査したが、2000年7月より済州大学校博物館が再調査を実施しており、その発掘状況を確認することができた。
- ④三陽洞遺跡の保存、整備状況の確認
- ⑤済州大学校において資料の実見と情報収集
済州島における主要な遺跡の出土遺物の展示を実見。



第1図 濟州道の主要遺跡

(原図：李 1995『濟州島考古学研究』図8に主要遺跡を印す)

- 1：高山里遺跡 2：金寧里遺跡 3：北村里遺跡 4：上幕里遺跡 5：三陽洞遺跡
6：龍潭洞 7：郭支遺跡 8：高内里遺跡 9：終達里遺跡

支石墓に関する調査及び、新たな知見を確認する。

⑥開設準備中の国立博物館の見学

⑦支石墓の再確認

内陸部にある支石墓の実見。

2. 濟州島の考古学研究—島嶼域における考古学研究

まず濟州島における考古学研究について、李清圭氏（1995）の著書を参考にして概観してみる（註2）。

濟州島における先史考古学の研究史は大きく3段階に分けることができる。

まず第1段階は、ほぼ1970年代初め頃までに相当し、一部の試掘調査と分布調査を通じて、支石墓と無文土器に対する検討が行われた。

濟州島における考古学資料の確認は1914年頃まで遡り、鳥居龍藏氏は、濟州島出土の土器を弥生式土器の系統とみなし、濟州島の位置付けとして、日本九州と韓半島を結び付ける役割も指摘した（鳥居1924）。

第2段階は、層位学的調査の進展と旧石器時代及び新石器時代に関する検討が本格

的になった。郭支里遺跡は 1973 年、宋錫範、江坂輝彌両氏によって確認され、1979 年に李白圭氏によって発掘が実施された。この調査の結果、無文土器の年代観が明らかになり、李氏は孔列土器が慶南海岸地方から伝来してきたものであると論じ、済州島と韓半島の関係について具体的に論議されるようになった。

第 3 段階になると、各時代にわたる発掘調査の進展と、済州島全域に対する分布調査が実施され、とくに李清圭氏が指導する済州大学校博物館と史学科チームによって調査が実施されるようになる。

このように研究史を見てみると、層位的な発掘調査の進展によって、済州島における独自の時期区分が考古学的に押さえられるようになり、一方で、韓半島を中心とした周辺地域との関わりが各時代にわたって具体的に検討されるようになった。個別研究として、宋錫範氏の支石墓に関する論考（1979）も、済州島から韓半島、西北九州を視野に入れたものである。こうした周辺地域との比較研究の重要性は、任孝宰氏（1986）が「済州島の地理的な位置から見ると、韓半島南部から島嶼地方、九州、沖縄及び中国大陸などの文化的連続性が認識され、各地域間の文化交流の状況を明らかにする為には比較研究が必要である。」と指摘していることに端的に示されている。

ここで、島嶼域である済州島における考古学研究を、同じく島嶼域を対象とする台湾考古学と合わせてみると、次のような 3 つ大きな流れを読み取ることができる。

まず、在外研究者（外国人を含む）を中心とした「発見の時代」（前述の第 1 段階）、在地研究者による地道な調査を踏まえた「編年研究の確立した時代」（第 2 段階）、そして、近年の「調査研究が多様化していく時代」（第 3 段階以降）へと移行する中、島嶼域という地理的環境を考慮した研究課題が浮かびあがってきているように思われる。

3. 支石墓—島嶼域における外来要素の受容と展開

前述したように、済州島における考古学研究において、支石墓を通して、韓半島との比較検討がなされている。韓半島を含む東北アジアの支石墓については、形態の差による分類（卓子形、碁盤形）、分布地域による分類（北方式、南方式）、さらに下部構造の差によって細分も行なわれてきたが、こうした分類に合わない類例も増加し、所在地名をとって、分類名を付す場合もあり、支石墓の範疇自体、諸説認められるようになった。

このように分類が多様化していく背景には、支石墓の系統論が深く関わり、東北アジアに分布する数多くの支石墓は、その型式、構造も多様性が認められ、既存の分類

にあてはめるだけでは、その性格を把握することが難しくなってきたと言えよう。

そうした中、1997年に西谷正氏を研究代表者とする『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』平成6年～8年度科学研究費補助金（基盤研究A2）研究成果報告書が刊行された（註3）。その中で、「これまでの支石墓研究においては、中国・朝鮮・日本でそれぞれ個別的行なわれていたが、本研究計画では、各専門分野の研究者が結集して、東アジアという視野で総合的に研究することにしたのである。」としており、一方で、各地における支石墓の出現－展開－消滅という流れを追うことが意図されており、支石墓研究の研究成果と課題を知る上で重要な報告となっている。

濟州島における支石墓の発見は、1932年まで溯り、1969年には郭支里支石墓が調査されている。当初、濟州島の支石墓も、韓半島における支石墓の分類にあてはめ、その位置付けを捉えることに主眼が置かれていた感が強い。すなわち、卓子式の変形、基盤式の変形、支石がない蓋石式とする見解が併存していた。

その後、1985年には濟州市の龍潭洞、外都洞の2ヶ所で本格的な考古学調査が実施された。こうした調査の結果、濟州島の支石墓は、時期的にも、そして構造的にも、韓半島の分類にあてはめることができないと考えられるようになった。

その結果、李清圭氏（1995）は、濟州島の支石墓を以下のように分類し、濟州島における支石墓の時間的変遷を追求する方向を示した（表1）。

そして、外形上の変遷として、板石形の支石墓が新しく、濟州島支石墓の完成段階に位置付け、これは、共伴遺物からみても、年代が新しいことが裏付けられている。

ここで、濟州島の支石墓研究の課題を整理してみたい。

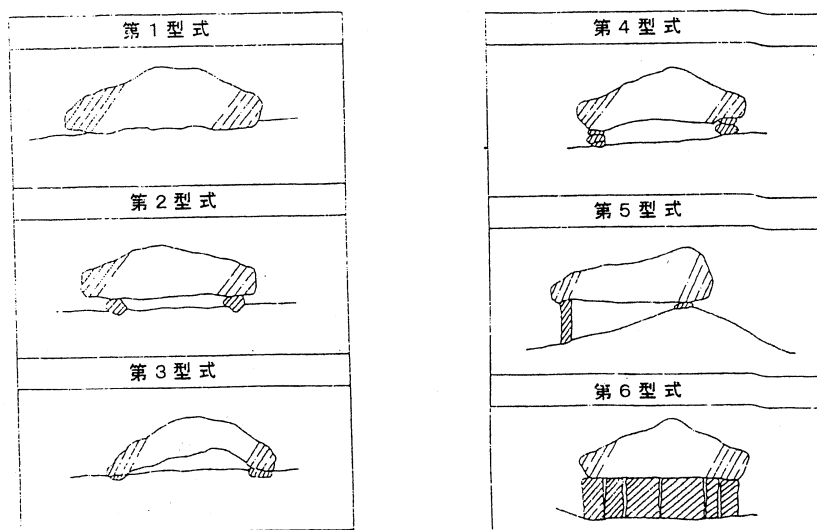
まず、濟州島における支石墓の分布状況の把握と基礎的データ（測量）の蓄積が急務であろう。宋錫範氏（1979）の集計では、総数63基、完全な状態34基としており、さらに、濟州大学校博物館チームは現在、支石墓の基礎的データの収集を行っており、康昌和氏のご教示によると172基の支石墓が確認されている。

とくに、最近、内陸部においても支石墓が確認され、これらは、周辺に遺物散布地が確認されておらず、孤立した状況において存在することが特徴である（註4）。一方、龍潭洞などの支石墓群は、付近に遺物散布地が存在し、平坦な土地、近くに河川が流れるなどの立地条件を備えている（第2図）。また、牛島の支石墓も海岸沿いに立地しており、当時の集落との関わりなど検討を要する。

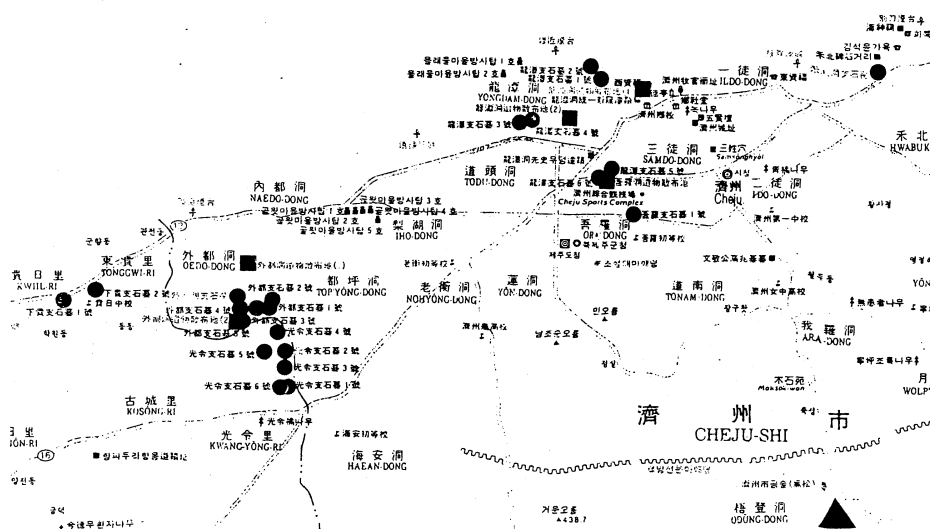
ところで、こうした分布状況を把握する必要性は、支石墓の保存にも関わる問題である。濟州島に限らず、支石墓は地上に大きな石を置かれているため、耕作などの関係で、破壊、移動されたり、現状の変更が著しく、早急に記録化することが望まれる。

表1 濟州島の支石墓分類 (李1995)

分類	埋葬位置	支石の形態	上石の形態
第1型式	地下	無	板石・碁盤形
第2型式	地下	塊石形	碁盤形
第3型式	半地上	塊石形	アーチ形
第4型式	半地上	塊石形・二重支石	不定形・碁盤形
第5型式	半地上	塊石形・板石	不定形・碁盤形
第6型式	地上	板石	不定形・碁盤形



(支石墓の分類模式図は康昌和氏 (1996) の論考より引用した。)



第2図 濟州島の支石墓 (龍潭洞周辺地域)

(原図：韓国地図院 1996『濟州道文化遺蹟地図』より抜粋)

●：支石墓 ▲：内陸側にある支石墓 ■：遺物散布地

そして、支石墓と報告された遺構の下部構造の把握、出土遺物の確認が問題であり、濟州島において、下部構造が明らかな事例は少なく、その構造の把握が必要である。こうした調査研究の成果を踏まえて、改めて、濟州島における支石墓の出現—展開—消滅を時間軸の中で把握し、韓半島、そして東北アジアの中での位置付けを明確に示さなくてはならない。

4. 遺跡の立地—島嶼域における遺跡の態様

濟州島において、島内全域で調査が実施されるようになり、各時代の遺跡のあり方が注目されており、例えば、濟州島の遺跡の中で、確認された遺跡数も多い郭支1式土器時期について、李清圭氏（1995）は、立地条件（土壌、河川、湧水など）を踏まえて、遺跡の分布状況を次のように整理している。まず、主要な遺跡の分布を見ると、旧巖土壌群の分布と密接な関係があり、同時期の村落の立地条件として畑作が有利な地域が選択されたことを示す。そして、濟州島は海拔1950mを頂点として、内陸に行くほど気候の条件が悪くなるため、遺跡は100m以下に分布する（第1図）。実際に、先史時代遺跡を踏査するにあたって、ほとんどの遺跡が海岸沿いに走る12号線道路に沿って分布することがわかる。また、同地域は漁業、農業に有利な地域であると同時に、沿岸航海と陸上交通などの好条件を備えており、海岸地帯以外の村は中世以後に開発されたと考えられる。

このように、濟州島と言う島嶼域に見られる特異性として、李氏が指摘しているように、土壌と気候、そして地質的自然環境が文化形成に強く影響を及ぼす。このため、濟州島という島嶼域における人々の居住のあり方を検討するにあたって、自然環境との強い関わりは看過できない視点であろう。

こうした視点は、同じ島嶼域の考古学研究として、臧振華氏（1991）による澎湖諸島の調査にも共通している。同氏は、澎湖諸島の考古学研究の利点として、大陸との文化関係の探索ばかりでなく、島嶼域という面積が限られた地域をあつかうことによって、一地域の全容が把握でき、なおかつ特殊な自然環境を有することに注目している点は、まさに、島嶼域の考古学研究の意義を示しているように考えられる。

5. 島嶼域として考古学研究の課題

島嶼域における考古学の研究テーマとして、上述したように周辺地域、本土との文

表2

時期区分	土器文化				年代	稲作	貝塚	支石墓
	有文土器	無文土器	赤褐色土器	灰色陶器				
耽羅以前	高山里式				B C 3000以前			
	北村里式				B C 2000~1000		○	
		上幕里式			B C 500~300 300~100	?	○ ○	○
耽羅前期			郭支1式	郭支1式陶器	B C 100~A D 500	○	◎	○
耽羅後期			郭支2式 (高内里式)	郭支2式陶器	A D 500~900	○	○	

化関係、遺跡の立地や遺構の分布から導き出される居住形態の変遷、そして生業形態の変遷などをあげることができる。

ここで、こうした議論を展開する上での課題について整理してみたい。

まず、同一時期における島嶼域と本土側の文化関係を示すには、時間的併行関係を明らかにしなくてはならない。現時点で、文化要素の比較をする上で、済州島と韓半島、また台湾と大陸側において時間差が認められる。これには、放射性炭素年代法のデータの比較ばかりでなく、各遺跡、各地域において層序関係を踏まえた編年研究の細分化を目指す必要があるのではないだろうか。とくに時代の移行期における編年の細分を通じて、時間的に前後する文化の継承関係をさらに探求しなくてはならないであろう。

こうした広域編年網の確立によって、外来要素の受容時期のずれ、受容から展開までの継続時間長さなど、時間差の生じる意味も考慮しなくてはならない。

また、外来文化の導入と、各地の受容、展開の両側面を検討する必要がある。例えば、先史時代における外来文化の代表として、稲作文化の広がり重要視されており、済州島においても、稲作開始時期の位置付けが問題となっている。

稲作文化の導入にあたって、稲作に直接関わる、植物遺存体や農耕具などの技術的側面以外にも、水稻耕作に伴う漁撈形態、紡織技術を示す紡錘車などの研究にも注意を払う必要があるだろう。一方、貝塚遺跡の出現、展開も、農耕の進展との関わりの中で捉え直すことも課題である(表2)(註5)。

さらに、韓半島と済州島とも文化交流の実態を探る上で、半島沿岸部の島嶼域の動態は注目される。筆者は、これまでも台湾海峡兩岸地域の文化交流を検討する上で、東南中国の沿海側に広がる島嶼域の先史文化の動態を問題としたが、長江以南の沿岸各地域は、島嶼域を包括しており、各島嶼域との往来も頻繁であったと考えられ、こうした島嶼域を含む小地域のネットワークを覆うように台湾海峡を超えたネットワー

クが重層的に存在していたと想定している。このような状況は、韓半島と済州島の間においても、共通するのではないだろうか。

6. おわりに

以上のような済州島における考古学研究の状況を鑑みると、やはり島嶼域としての特質が問われるものと考えられる。まず、周辺地域との関係から、文化交流の懸け橋的な役割が浮かびあがってくる。これは、言わば島外との関係であり、考古学的には搬入品、搬出品、在地品として捉えることのできる問題である。一方、島嶼域という限定された自然環境の中での居住のあり方や島内の地域性に関わる問題を検討する必要がある。

すなわち、島嶼域の考古学として、日本における南西諸島は言うまでもなく、筆者が研究対象としている中国東南沿海地域においても、例えば長江下流域と舟山群島、東南中国と台湾、海南島、香港近辺の島嶼部など共通したテーマが存在すると言える。従来の研究では、総じて本土との関係に着目されていた傾向が強かったが、各島嶼域での調査が進展する中、島嶼域内での遺跡のあり方をめぐる検討が深めるようになってきたと言える。

このように、島嶼域における考古学研究の課題は、島外との関係、島内における関係という両側面の視点をもつことによって、今後、東アジアから東南アジア、そしてオセアニア世界に広がる島嶼域における比較考古学的研究が望まれるように考える。

また、調査期間3年間において、研究方面の深化ばかりでなく、国立博物館の開館や、各遺跡の保存整備が進行している状況を垣間見ることができ、そして、実際それらに携わっている研究者諸氏と接することができたことは、有意義であった。

今回の調査では、研究分担者である李清圭氏にご指導いただき、各年度にわたって、済州大学校博物館の康昌和氏をはじめとする考古学スタッフにはご協力いただいた。

調査にあたっては趙現鐘氏(国立済州博物館)、高才元氏(済州道民俗自然史博物館)にご協力、ご指導いただいた。また、呉盛奎氏には、資料収集及び検討にあたって、ご協力いただいた。西谷正先生には、支石墓研究に関する文献を賜り、ご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

註釈

- 註1 牛島の支石墓及び遺物散布地については、北濟州郡・濟州大学校博物館（1998）にも報告されている。
- 註2 研究史については、最近、康昌和氏（2000）によっても整理されている。
また、江坂輝彌氏の論考（1973）の中に鳥居龍蔵氏の調査などに関する研究史が紹介されている。
- 註3 朝鮮半島について、甲元真之氏（1997）によって詳細に検討されている。
- 註4 康昌和氏のご教示による。
- 註5 表2は、李清圭氏（1995）を参考に、李氏にご意見を伺いながら、各文化要素の位置付けを筆者なりに整理したものである。

引用参考文献

（韓国語）

- 任孝宰 1986「濟州島先史文化研究の現況と問題点」『濟州島研究』3
- 李清圭 1995『濟州島考古学研究』学研文化社
- 濟州道 1996『濟州の防禦遺跡』
- 北濟州郡・濟州大学校博物館 1998『北濟州郡の文化遺蹟（I）』
- 康昌和 1996「濟州島支石墓」『第4期博物館大学市民講座』
- 康昌和 2000「濟州地方埋蔵文化財の発掘と保存」『博物館年報』第1号

報告書

北濟州郡・濟州大学校博物館

- 1997 a 『濟州郭支貝塚』濟州大学校博物館調査報告第20輯
郭支貝塚IV・V・VI・VII地区発掘調査報告

北濟州郡・濟州大学校博物館

- 1997 b 『濟州終達里貝塚』濟州大学校博物館調査報告第21輯
終達里貝塚1地区発掘調査報告書

（日本語）

- 鳥居龍蔵 1924「民族学上より見たる濟州島（耽羅）」『日本周囲民族の原始宗教』

(『鳥居龍藏全集』に所収)

- 関野雄 1938「济州島における遺蹟」『考古学雑誌』第28巻第10号
江坂輝彌 1973「韓国の遺跡遺物見学旅行案内記(7)」『考古学ジャーナル』85
宋錫範 1979「济州島の支石墓」『考古学ジャーナル』第161号
西谷正 1997『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』
平成6年～8年度科学研究費補助金(基盤研究A2)研究成果報告書
甲元真之 1997「朝鮮半島の支石墓」『東アジアにおける支石墓の総合的な研究』

(英文・中国語)

- 臧振華 1992『澎湖群島の考古学』中央研究院歴史語言研究所專刊95

環東中国海における 二つの周辺文化に関する研究

— 沖縄と済州の「間地方」人類学の試み —

平成 10～12 年度科学研究費補助金
基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書
課題番号 10044011

平成 13 年 3 月

研究代表者 津波 高志

(琉球大学法文学部教授)